

# 新飛泉

第2号

(株)イメージプラン飛驒  
〒506-0808  
高山市松本町2118-27  
TEL 0577 35-2360  
FAX 0577 35-0507  
http://www.image-plan.com  
taruhida@iilac.ocn.ne.jp

## 今月の紙面

特集……二面  
「今、高山市図書館が熱い」  
コラム「デイベート」……三面

## ご挨拶

イメージプラン飛驒、社長下裏です。今回からこの「新飛泉」はホームページ上での公開となりました。ここでご覧になられている皆様には、当社HPにお越しくださいまして誠にありがとうございます。

おかげさまで、一月二十一日に発刊になりました「眼の色が変わる」あなたが主人公も順調な売れ行きで、たいへんありがたいことと思っております。

また、各種セミナーのほうもたくさんの方の依頼をいただきました。時代は大きく変わってきております。新しい品質の概念と仕組みが企業を支え大きく成長させるというところを樽を通して学んでいただきます。実際に樽を組み立てるセミナーは大変好評のようです。

仕組みというものは本当に企業の行く末を決定する大きな要因の一つです。よく自分はこれだけの売上を達成したと自慢をなさる方

がいらつしやいますが、このような発言は自慢できるものではありません。それは景気が良ければ誰でも出来ることであり、後世に残るものではありません。しかし仕組みは後世に残るものです。作った仕組みが企業の中で機能していることはその仕組みを作った人にとっては自慢できるものとなります。

コンサルがいる間は良かったが、いなくなったらだめになったという話を聞きます。それは、その企業の中に有効な仕組みが構築されなかったからではないでしょうか。私どもの喜びはその企業の皆さんが作られた仕組みによって会社が永続的に繁栄されることです。仕組みは一時的なものではなく、恒久的なものになり得ます。それにはもちろん継続的改善(デミングサイクルPDCA)の仕組みが必要になります。いずれにしても、仕組みがしっかりしている企業はこの厳しい時代を必ず乗り越えていくでしょう。

## ホームページのご案内

新飛泉の発行と時を同じくして、ホームページも全面リニューアルされました。ずいぶんと放置していましたが、昨年8月、今年の1月と力を入れてリニューアルしています。細かい更新も月に1回は行いますので、この新飛泉と共にぜひお立ち寄り下さい。

この新飛泉のバックナンバーだけでなく、旧飛泉のバックナンバーもこのホームページにありますので、もしよろしければ、そちらのほうもご覧下さい。また新刊「眼の色が変わる」の注文フォームやアンケートフォームもございます。ご利用ください。

これからの希望としては、ITを利用した経営診断や経営相談も行っていきたくと思っています。今後の発展に期待してください。

## 大募集!

講演・セミナーの依頼はございませんか? イメージプラン飛驒では今、講演・セミナーの依頼を大募集しています。商工会などの団体で、講演を企画するご予定はございませんか。異業種交流でセミナーをするつもりだが、講師を探しているというようなことはございませんか。企業内で、社内研修の一環としてはいかがでしょうか。

組織活性化・意識改革などをテーマの講演・セミナーを行っております。「中村久子女史に学ぶ」というテーマでの講演も受け付けております。これまでに講演活動は北は北海道から南はフィリピンまで幅広く行っております。今まで講演に対する様々な注文にも答えてまいりました。講演時間も一時間から八時間まで自由に調節できます。あなたの希望に添える講演がここにあります。

講演・セミナーをご検討の方はぜひ、一度イメージプラン飛驒までお電話かメールでお知らせ下さい。

二〇〇四年四月二十三日に高山市図書館が移転をして、リニューアルオープンしました。場所は元高山市の市役所で、近代建築物風の建物がとても美しく清潔感が漂っています。

外だけでなく、中もものすごくよくなっています。蔵書数も大幅に増え、約十五万冊と旧図書館より五万冊もアップしています。また、AVやおもちゃの貸し出しも行っています。本などの検索は今流行のパソコンを使つてのフリーワード検索などがありますが、検索結果をプリントアウトすることができるとても便利です。検索はパソコンだけではなく、職員の人に尋ねることももちろんできます。図書館に勤務されている方の対応も迅速丁寧で好感が持てます。先ほどの検索用のパソコンですが、貸し出しにも使えるようになっていきます。つまり、図書館職員の方に本を渡さなくても、自分で貸し出しの手続きをすることができるようです。やり方もそんなに難しくありません。カウンターが混んでいるときなどはとても便利です。

前の図書館と比べて、一日の平均利用者数は約三倍になったそうです。勉強のために来ている学生も多いですが、一般の人もかなり

たくさん来ています。一階は、学生のための学習室や子供のための絵本をたくさん置いた「木の国こども図書館」があります。この「木の国こども図書館」は大きな木のオブジェがあり、寝転がって本が読めるようになって

# 特集

## 今、高山市図書館が熱い



新しくなった高山市図書館

掛けがあります。五人掛けのいすは座りやすいのですが、二人掛けのいすは長時間だとちよつと座っているのが苦痛になってきます。二階は一般の書籍と雑誌が置かれています。また、本の調べ物をするための机や、休むため(?)の長いすなどが設置されています。パソコンが置かれた机もありました。たくさん本に囲まれてとても幸せになれる空間です。

います。また、「マルチメディアコーナー」が一階には設置してあります。ここでは、DVDを見たリ、CDを聴いたり、インターネットを楽しんだりできるようになっています。パソコン席は一人掛けですが、視聴席は五人掛けと二人

できますから、職場や家で本の貸し出し状況を確認できます。また、借りられている場合は、その次に借りることができるよう優先的に予約を行うことができます。とても便利なサービスです。二点目は、本の宅配サービスで

高山市図書館のユニークなサービスとして、二点ここで紹介します。まず、一点目として、本の予約ができることです。借りたい本が借りられていて、次に行ったときにはまた別の人に借りられているなどで、何回も図書館に足を運ばなくてはいけないことがあります。ここでは、本の検索がWEB上で行うことができます。また、職場や家で本の貸し出し状況を確認できます。また、借りられている場合は、その次に借りることができるよう優先的に予約を行うことができます。とても便利なサービスです。

す。対象は市内(合併後の地域を含む)に住んでいる方(高校生以下の学生は利用できません)、または、高校生以下で入院などの理由で来館することができない方です。宅配サービスの登録を事前にしなければなりません。また、WEB上でもその登録は行えます。申込は「図書資料宅配申込書」に図書名など必要事項を記入し、郵便、FAX、メールで送付または電話でいいそうです。ただし、「送付代金は利用者の負担となります。着払いとなりますので、ご希望の宅配業者、時間を指定してください。」となっています。配達先は、自宅・勤務先・病院などどこでも可能だそうです。非常に便利なサービスだと感じています。特に入院されている方や、自宅療養中の方など外出できない人にとって、本は欠かせないアイテムだと思います。また、私たちのような職業ですと、たくさんの知識を必要としますので、図書館の充実には非常にありがたいことです。

最近、本を読んでいない方、図書館にあまり行っていない方など、一度高山市図書館に行かれてはいかがでしょうか。知的探究心がくすぐられること間違いなしです。

## コラム

## ディベート 第2回

今回はディベートの流れについてお話しします。

基本の大前提として、ディベートの試合は、肯定側の選手・否定側の選手と、試合の勝敗を決めるジャッジ(審判)の三者から成り立ちます。ディベートの試合において、選手の最大の目的は、議論を通じて「第三者であるジャッジ(審判)を説得する」ことです。決して、「対戦相手を言い負かす」ゲームではありません。また、後述する質疑の時間をのぞき、すべてのスピーチは正面の論壇に立つて、ジャッジの方を向いて行います。説得の対象は対戦相手ではなく、ジャッジなんだということを意識しながら話すようにしましょう。

## 試合の流れ

まず最初に、話し合うべき論題を決めます。決められた論題をもとに、肯定・否定の二つに別れ、ジャッジを説得すべく交互に議論を展開することになります。この際、どちらのチームが肯定側・否定側になるのかは、各試合の直前にランダムに決められます。ディ

ベートの試合は、自分の個人的な主義主張を訴える場ではない、という点に注意してください。論題によつては、「自分は絶対にこの論題には賛成(あるいは反対)できない!」と感ずることもあるかもしれませんが、あれども、あえて逆の立場に立つて論題を見つめ直してみることで、必ず新しい発見があるはずで、肯定・否定双方の立場から客観的に論題を検証していくことで、ひいては自分の視点そのものを深めることにもつながるのです。通常、論題に示された政策を採用すべきなのかどうかをジャッジに示すため、もっともわかりやすい方法として、肯定側はメリット(政策から予想される「良いこと」)を、否定側はデメリット(政策から予想される悪いこと)をそれぞれ提示します。たとえば、「日本は積極的安楽死を認めるべきである」という論題なら、メリット:末期患者の苦痛からの解放、デメリット:誤診や周囲からの圧力による、望まない安楽死の増加、といった具合です。各チームは自分たちのメリット・デメリットを守りつつ相手の

議論に対して反論・再反論を繰り返し、すべてのスピーチが終わった時点で、ジャッジがメリットとデメリットのどちらが大きく残ったのかを判断し、勝敗を決定します。なお、ディベートには「引き分け」という判定はありません。仮にメリットとデメリットの大きさが同じだった場合、「あえてその政策を導入する意味はない」とみなされ、否定側の勝ちになります。

ディベートでは、ゲームとしての公平性を保つ目的から、各選手のスピーチの順番・役割・時間があらかじめ決められています。目的によつて様々なスタイルが存在しますが、イメージプラン飛驒では、以下のような形式を採用しています。

一チームは原則として、三人で構成されます。各スピーチでの持ち時間は、立論が三分、質疑が二分、第一反駁が二分、第二反駁が二分。

スピーチの順番は以下の通り。

- 肯定側立論(三分)
- 否定側質疑(二分)
- 否定側立論(三分)
- 肯定側質疑(二分)
- 作戦タイム(五分)
- 否定側第一反駁(二分)

- 肯定側第一反駁(二分)
- 否定側第二反駁(二分)
- 肯定側第二反駁(二分)

四種類のスピーチのうち、質疑だけは、直前の立論担当者に直接一対一で質問する形で進められます。それ以外のスピーチでは、原則として一人のディベーターが話している最中に、他のディベーターが発言することはできません。

一試合で約三十分ほどになります。短い時間の中で相手の意見を正確に把握し、反駁を行わなくてはいけません。ものすごい集中力を必要とします。審判になった人も判定をしなければいけませんから、より真剣に耳を傾けることになります。審判は声の大きさや態度も判定の材料にします。参観者もメモを取りながら、試合を見学します。見学者がいるほうが試合は盛り上がります。

試合は、審判の判定が出て終了しますが、試合後にアフターディベートをすることが望ましいです。試合を振り返っての感想、反省などを述べ合います。次のディベートはさらにすばらしいものになります。

# 個人史伝

## 60年の歩み

### 第2回

この個人史伝は、当社社長、下裏の六十年の歩みをひも解いていく超大型(?)連載です。

社会人になる前の一番の思い出であり、今もその影響を受けている出来事があります。それは父が42歳で失明したことです。その時、姉は中学2年、私は小学5年、妹は5歳と3人の子供を抱えていた父母の心労はいかばかりであったでしょうか。その苦労を本当に理解できるようにしたのは、私も家庭をもち、子供が生まれた頃からです。父は45歳で岐阜盲学校に入学し、2年間の就学で指圧師としての免許を得、私達を育ててくれました。父の存在は私にとって本当に大きな大きなものです。私は父が在学中、この盲学校を訪ねる機会がありました。その時、ある全盲の生徒さんが言われた言葉に大変なショックを受けました。「私は眼が見えなくていいのです。眼は見えませんが、私には私に見える世界があるのです。「この言葉は、今も心に残り、「この方に見える世界とは、どんな世界なの

だろうか。今、私が見ている世界は本当の世界なのだろうか。「こんな疑問が今も私の中に渦巻いています。もの見方が変わる大きな出来事でした。このように、幼少時代に私の歩みの推進力が生まれました。

今回は、コンサルタントを夢見るようになったきつかけのお話です。

## 気づきの窓 紹介コーナー

気づきの窓は、毎回の研修の最初に配付し、読ませていただくA4サイズ一枚の用紙のことです。ここでは、様々な「気づき」をしていただくヒントがあります。この紙上でも紹介をしていきます。第一回目は二世研修で使われたものです。経営者に対しての「気づき」がそこにはあります。

アメリカの故J・F・ケネディが日本人記者団から最も尊敬する日本人は誰かという質問を受けた

とき、彼は「ウエスギヨウザン」と答えたといっています。ところが、その場に居合わせた記者団はウエスギヨウザンを知らなかったというエピソードがあります。このウエスギヨウザンとは、江戸時代の九代目米沢(山形県)藩主・上杉鷹山(うえずぎよづさん)のことでした。

ちなみに内村鑑三(近代日本の思想家)は「代表的日本人」という著作の中で五人の人物を紹介していますが、その一人が上杉鷹山であるといっています。

上杉鷹山は、民衆を愛し、民衆のための政治を行った名君として知られており、彼は、君主の心得として、次の三項目を内容とする指針を残しています。

- 一、自らの利益のために国家を用いてはならない。
- 一、自らの利益のために人民を用いてはならない。
- 一、人民のために君主があるのであり、君主のために人民があるのではない。

これは、「伝国ノ辞(でんこくのじ)」と呼ばれ、その内容は現在の民主主義思想であり、封建時代にあつてこの政治信条は類例がないといわれています。

この「伝国ノ辞」を次のように考えてみました。

- 一、自らの利益のために会社を用いてはならない。
- 一、自らの利益のために社員を用いてはならない。
- 一、社員のために社長があるのであり、社長のために社員があるのではない。

いかかでしょう、企業にとっても同様なことがいえるのではないのでしょうか。リーダーの行動の成否によって、企業の繁栄や従業員運命が決まります。とくに、企業のリーダーが関与した不祥事が頻発し、それによって著名企業といえども淘汰されていく現在、企業リーダーのあり方が厳しく問われております。

本来、多くの人々を率いるリーダーとは、報酬のためではなく、その使命感をもって、集団のために自己犠牲を払うことも厭わぬ、高潔な「人格」を持つていなければなりません。

リーダーとしての「才覚」を發揮することも必要ですが、「人格」が「才覚」の進むべき道を決めてしまつことを十分理解しておかなければいけないのではないのでしょうか。